

第2章 銃後

子どもたちの生活②

あしりべつじでの思い出

木村信也さんのお話から

私は昭和三年（一九二八年）に、昔で言えば札幌郡豊平町大字月寒村あしりべつ北野通で生まれました。私が十七歳の時に戦争が終わったので、兵隊には行っていないませんが、戦争中には多くの苦労がありました。

昭和十一年、私が八歳の時だと思いますが、石狩平野で陸軍特別大演習が開かれるため、皇族（天皇、各宮様）が、旧国道三十六号沿いの、厚別尋常小学校（現清田小学校）の前を通過することになり、学校の生徒全員が沿道に並んでお迎えしたのを覚えています。「来た、来た。」と語り合っていたら、「最敬礼」と号令がかかりましたので、頭を下げました。通る音だけが聞こえ、「直れ」で頭を上げると、もう後続の車だけになっていました。

私が十二歳の頃は支那事変の最中で、調味料の砂糖や、あげものにする油といった食料品など、色々な物資が配給制度になりました。自分たちで味噌をつくろうと、春に大豆をまいて、秋に収穫。乾燥させておいて、冬の間大豆を蒸かし、もち白で米こうじと大豆を細かくしました。自家製で味噌を作るのに二、三年かかりました。

このころは、今のように町内会などの組織はありません。みんな、農業を主とした仕事をしていたので、昔から農事実行組合という組織があつて、札幌役場からの公文書などはそこに届きました。

配給物についても、まず組合長に連絡があり、それから組合員のもとに届けられます。父がその役員をしていたのですが、ある時、各家庭に配給するために持ってきた生菓子を一つ、私に広まりました。

○皇族 天皇の一族。

○支那事変 日中戦争に
対する、当時の日本側の
呼称。

○配給制度 米や味噌、
砂糖等の食べ物などの物
資を、生活の必要に応じ、
平等に割り当てて配る制
度。札幌市では昭和十五
年（一九四〇年）四月に見
童のゴム靴に切符制が導
入され、六月に米、砂糖な
どに広まりました。

○劍幕けんまく 怒った恐ろしい顔つき・態度。

がつまみ食いをしてしまったことがあります。めったにそんなお菓子かしなんて食べられなかったもので、ついつい手が出てしまったのですが、とにかくものすごい劍幕けんまくで怒おこられました。今でもその事をはっきりと覚えています。私たちが小さい頃ころは戦争中で、何事も自分の自由にならなかったのです。

学校は、義務教育ぎむが六年制ねんせいで、高等科に二年、青年学校に二年通いました。そして終戦になりました。学校時代はとにかく勉強をしました。

私の家は農家で本当に貧しいますどん底の生活でした。春に農事実行組合（農業協同組合、現在はJA札幌農業協同組合）から肥料ひりょうなど必要なものを借りて農作業をし、秋の収穫しゅうかくで支払いしはらをするぎりぎりの生活で、本当に苦しい時代でした。

村から出征兵士しゅつせいが出たときは、学校も、町内会も総出そうでで見送りをしていました。出征するの人は人だけではありませんでした。本家の農耕馬のうこうも軍馬として出されたのです。私たちと本家の家族は、一緒に札幌駅さっぽろまで行って送りました。馬も悲しそうな目つきをかわいそうして可哀想かわいそうでした。兵士

○本家 おおもとになる家筋いえすじ。いえもと。宗家そうけ。分家から見てその分かれ出たもの家。



イメージ図

配給の様子

あしりべつでの思い出

と同じです。

馬がいなくなると農作業も大変です。手ぐわというわけにいかないから、耕すことも満足にできなくなり、農業なんて成り立ちません。もちろん、軍馬の代わりを国が補償してくれる訳でもありません。「国のために馬も出征したのだから誇りに思うように。」と言い聞かされる、そういう時代でした。

高等科を二年で卒業すると青年学校に入り、そこで初めて戦闘訓練を体験しました。教官は兵隊から帰ってきた人たち。初めは木銃を持って「ヤーヤー。」と突き合いや、銃の担ぎ方などを教えられました。その頃は「一億総出」といって、誰もが竹ヤリを持たされたのです。今思うと終戦間際でしたが、もちろん当時は終戦だとは思っていませんので、我々も訓練に励みました。

また、学校には三八銃の実物が十丁ほどありまして、青年団の先輩達が空砲を撃っていました。運動会では、紅白に分かれて演習訓練。お互いに空砲を撃ち合い、最後に木銃を付き合わせして終了でした。そんなことも思い出されません。

○木銃 木で銃の形に造ったもの。木製の銃。銃剣術などの練習用。

○三八銃 大日本帝国陸軍が採用した小銃。

○演習 軍隊・艦隊などが実戦の状況を想定して行う訓練。



イメージ図

戦闘訓練用の木銃

○艦載機 戦艦、巡洋艦などに装備され、そこから発着する航空機。

○復員 戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くと。また召集を解かれた兵士が帰郷すること。

若い人たちの大半は兵隊として軍隊に行っていましたので、人手不足の家庭に、訓練の合間をみて、青年学校の生徒が援農、お手伝いに行きました。

昭和二十年七月だったと思いますが、清田の上空にもアメリカの艦載機が何度か飛んできました。畑仕事中にサイレンが鳴ると、その時には飛行機が目の前まで低空飛行で来ていて、バンバンと音が鳴り、みんな一斉に防空壕に逃げ込みました。後から聞いた話では、白石駅の貨物列車が目当てだったとか。当時の北野は四十二、三戸しかなかったもので、防空壕はそれぞれ作っていたと思います。艦載機が来たときはびっくりして、もう北海道はおしまいだと思います。

昭和十八、九年ころの北野は軍隊施設一色でした。今の清田一条一丁目あたりは山林地帯で、山をくりぬいて無線基地や物品倉庫などが作られていました。

そして、ようやく終戦を迎えました。当時は学童だったから、食べて、勉強して手伝いをしていればよかったですけれど、私たちは本当に苦労したと思います。自分が一人前になって、その苦労が分かりました。

終戦になって復員した方々から軍隊生活の話を聞くと、毎日「態度が悪い。」とか、「覚えが悪い。」と櫛の棒で赤くなるほどたたかれたそうです。昔は何でもお国のためだったそうです。

軍隊で兵隊生活をしてこられた方々に、本当にご苦労様でしたと申し上げたいです。

DATA

平成21年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月28日
- ・清田区役所



木村信也(きむら・しんや)さん

- ・昭和3年(1928年)生まれ
- ・清田区在住